The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コミュニケーション不全の活用法
Author(s)	池田, 光穂
Citation	Communication-Design. 2007, 0, p. 27-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

3. コミュニケーション不全の活用法

池田光穂

「今日、デザインを支える理論はなお、デザインの色あせた社会美学の基本理念を引き合いに出しているのだが、そうした理念が全体として俗物化の傾向にあるなかで、いまはわずかにその幽かな光が残っているにすぎない」――ゲルト･ゼレ『デザインのイデオロギーとユートピア』［1973］

どのような学術上の組織においても、それを支える人たちの理念理想の持ち方に多様性が認められることは自明である。にもかかわらず豊かな多様性や異端が放つ魅力的存在は、我が国の多くの職域においては忌避されることはあれ賞賛されることはきわめて少ない。いわんや学問の多様性が容認されかつ精神の自由を享受している大学大学院においてをや!

学問の多様性…

精神の自由…

しかしながら学問における理念や実践に多様性が失われ、柔軟性が失われ硬直していく時、その本来の精神の自由を享受していた学園の歴史的使命は終わるといっても過言ではない。生まれたばかりと思われている

柔軟性…

CSCDもまたこのような形で終わる未来が待ち受けているかもしれない。だが、私はこれとは別のかたちで未来に起こるであろうCSCDの終焉について議論を続けてみたい。

この文はCSCDが将来、その歴史的使命を終えて人々の記憶の中に語られるだろう時、未来から現在に回顧したCSCDが果たしている理念と実践について述べるものである。もちろん私は、巻頭辞のような呪詛を大阪大学や文部科学省当局にかけるものではない。また未来において現在を懐かしむ郷愁 ──言うまでもなく郷愁とはルサンチマンの別名なのである── をもつものでもない。CSCDの夢は未だ実現されざる希望が投げ込まれた組織つまり投企（プロジェ）であり、CSCDの活動の本質は我々の実践の痕に事後的に残されているものだからである。

…歴史的使命

うまく機能していないコミュニケーション

はてさて本センターの効能書の口上を述べる時が来た。現在の日本の多くの大学 ──当然、大阪大学もそれに含まれる── において、人間のあいだのコミュニケーションがうまく機能していない。次のような具体的な問題があるからだ。

- 大学および大学院に入学してくる新入生たち（フレッシュパーソン）と教員集団のあいだにさまざまなコミュニケーションギャップがある。これらのギャップは、それぞれの集団において具体的な不満のかたちで語られるが、背景にある原因や要因について十分な対策がとられることなく放置され、スタッフのわだかまりの中に沈殿している。
- 大学という組織のなかの人たちの間で信頼関係が樹立されない状況が続いている。たとえば教員は大学生たちが「世間の常識」を身につけていないことを嘆く。他方、常日頃から学生たちは教員たちが、自分たちの知識や理解度を超えた要求を突きつけてくると不満をもっている。
- 大学ではさまざまな研究活動がおこなわれるが、その実態がなかなか上手に社会に対して伝わらない。たとえば、大阪大学はインサイダーからみると日々刻々と変わっている事実を知るのに、世間の人たちは十年一日あたかも判で押したような「阪大像」をもっており事あるごとにそのステレオタイプで大学人をみられている事実を知らされる。大学人はもちろんそのことに言葉に表せないような不満を抱いているようだ。

…コミュニケーションギャップ

…信頼関係

…ステレオタイプな大学像

- 大学人はほんらい見識と寛容性をもつ人たちと見なされているのに、これもインサイダーからみると、その実態としてあまりの不見識と狭量さにあきれることがしばしばある。事態は深刻で、悪貨が良貨を駆逐している。つまり現在の大学人のイメージは、お調子者か気むずかしい者のどれかであり、もはや大学人は健全なコミュニケーション能力をもつ専門家とは見なされなくなった。

大学人のイメージ…

- 繰り返される大学内における不祥事。悲劇的な犠牲者すら生むこともある。大学は全職員の理性と良識に訴え、また倫理要綱を作成する。二度と繰り返さないために。しかし、二度と繰り返さないためには、大学内における人間関係の構造的問題の解消もまた必要ということを、大学の構成員たちはうすうす感じている。

人間関係の構造的問題…

共同利用施設として活用しよう

繰り返しになるが、CSCDがその歴史的使命を終える時、未来の大阪大学はこのような苦境をもはや〈過去の遺物〉――これは現時点における〈未解決の難問〉である――として葬っているはずである。CSCDはこのような問題を阪大全体のために単独で解決する組織ではない。問題を解決するのはあくまでも、現実に直面しているすべての当事者たちである。CSCDはこのような問題がどのようなことに起因するかについて当事者たちにヒントを授け、どのような問題解決に向けて行動すべきかについて研究教育する、阪大内の共同利用施設のことなのである。

共同利用施設…

CSCDが目指す阪大内のコミュニケーションギャップの問題解決に向けてのコペルニクス的転回への一歩を踏み出そう。まず問題解決の優先順位について意識しよう。その場その場における刹那的で表層的な問題解決は、根底にあるより高次で構造的な問題解決を先送りにしてしまう。かといって抜本的な解決には、組織そのもののグランドデザインから導き出される「大いなる決断」が必要だ。しかし、大阪大学は巨大な組織でその構成が複雑である。同時に、学問の覇権のみならず、部局の利害保持に心を砕く人に、現実から遠く離れた現場の理想的あり方を語ってみても馬の耳に念仏である。権力の中枢に居座り、まさに末端の組織の悲鳴が聞こえない人たちに、我々の教育現場のインターパーソナルな問題はあまりにも瑣末に映るからだろう。にもかかわらず我々には等身大の改革が必要だ。大学の組織の更新は、組織における草の根からの改革から

始まる。CSCDは新設されたにもかかわらず、阪大の草の根（グラスルーツ）たる協同的根っこ（＝起源神話の共有）をもっている。

だからこそ、コミュニケーションデザインという発想が必要なのである。コミュニケーションデザインとは、文字通り人間が行使する〈交通＝交信＝交渉〉（communication）を〈立案＝設計＝実践する〉（design）ことである。したがってコミュニケーションデザインは、草の根的 ――これは根本的（radical）に通じる―― で、かつ民主的と言っても過言ではない。この種の実践は、人間のあいだのコミュニケーション様式（モード）の改変・改善・変革を通して、キャンパスに生きる人たちのライフスタイルを変えてみようと試みるのだ。根っこのようにCSCDはしぶとい。

…交通＝交信＝交渉（communication）

…立案＝設計＝実践（design）

…コミュニケーション様式（モード）

もちろん現在のCSCDの現員勢力では、このような問題でまとめられる具体的な諸相のすべてに応えられるわけではない。すべてのスタッフがこの領域についての高度な専門性をもっているわけでもない。大学院生への共通教育を通しこの難問に対して理論的研究かつ実践的貢献をおこなおうという理念と情熱をCSCDのメンバーの多くが共有していることがCSCDのメンバーがもつ専門性ということなのである。

…大学院生への共通教育

大阪大学のわが同胞に対しては次のように呼びかけたい。CSCDは、全学の共同利用施設でもある。つまりCSCDが試みようとしている活動に参加するためには、専任教員、特任教員あるいは兼任教員［学外者には客員のさまざまなポストがある］となることで可能になる。言うなれば本学の教員であれば手続きを踏めば誰でも、この野心的で実験的な教育研究プログラムに参加できてしまうということなのだ。

…教育研究プログラム

そうなるとコミュニケーションデザインに挑戦する！　という標語におけるコミュニケーションとは、そもそもいったい何なのだという疑問が出てくる。たしかに19世紀中頃に実用化されるようになる電気通信技術の導入以降、人類が手にし続けてきたコミュニケーション技術の発達には、まさに喫驚すべきものがある。コミュニケーション技術の肥大化とは、人間のコミュニケーション様式の肥大化を生み出したことは間違いがない。

歴史を回顧すれば、コミュニケーション技術の〈発展〉とは、マーシャル・マクルーハンが喝破したように、人間の身体感覚の拡張という性格をもっていた。しかしモールス電信機による史上初めての通信電文“what hath god wrought”［神の為せる業］のように、その技術はしばしば人間性の概念を超えたもの、あるいはそれまでにない技術革新がもたらした心理的道徳的混乱［ないしはその可能性］として、社会的にはしば

…コミュニケーション技術

…身体感覚の拡張

しば否定的に評価されることとなった。他方、技術者は技術がもつ倫理上の問題に腐心することなく開発に専心していた。純粋に科学思考上における問題を考える時に、世間のことは余計な雑音に過ぎなかった。大学がそのような超俗的な科学者の孵卵器としての役割を果たしてきたことは事実だ。

しこうしてコミュニケーション技術の発達は、人間の可能性を拡張するものなのか、それとも神への冒涜をふくむ反人間的な歩みの始まりなのか。私たちが日々耳にするコミュニケーション技術の発達に関する報道には、この相反する２つの憶測のどちらか一方か、あるいは双方の意見の併記 ──「こういう意見もあるがこういう反論もある」というふうに── がみられる。技術的科学と似てコミュニケーション技術そのものは道徳的中立を標榜しているはずなのだが、人間社会の文化的技術として受け入れられる際には、ムーディーズよろしく道徳的な格付けをされるということかもしれない。

対人コミュニケーションの諸相

しかし神をも畏れない人間が、自ら造り出したもの（鏡像）に怖じけるとはどういうことなのか。私が、インテリジェンスとしてのコミュニケーションデザインという名の下で考えたいのは、そのような技術革新が派生的に生み出す神学的ないしは道徳的問題ではない。もっと単純で社会的存在としての人間が宿命的に担っている対人コミュニケーションのさまざまな諸相の具体的で綿密な検討であり、それこそが私たち大学人がおこなうべき使命なのだ。

対人コミュニケーション…

もちろん、世に数多あるコミュニケーションを事後的に解釈し、そこに造形的設計要素を抽出するだけでコミュニケーションデザインが完結するわけではない。そもそも人間が持ちうるコミュニケーションのあらゆる可能性を立案＝設計＝実践するという主張そのものには、やはりまた一種のいかがわしさがある。２つの主張ががっぷり四つに組んでいる時に、どのような事態に対しても万事上手く調停できるというのが理想的なコミュニケーションデザインというものでもないだろう。近年のさまざまな紛争解決や交渉術に関する諸研究を通して、きちんと手続きを踏めば、その状況に参与するプレイヤーを抽出し、それらの利害を調停し、最適な答えを導き出す論理構造を発見することは可能である。しかし、コミュ

紛争解決・交渉術…

ニケーションにおける参与者の多様なふるまいが、どれほど予測できるのかという点に関しては、まだまだ研究の余地は残されている。私たちは自分たちが実践状況において正確に何をやっているのかについては、われわれはいまだ十分に自覚的ではないのだ。

だが、この対人コミュニケーション研究という沃野の開拓に着手した私たちの最大の発見は、世事の解決策からコミュニケーションの根本問題まで、研究対象に極めて大きな多様性があることに気づき、つねにそれらが単一の解決策を容易に拒絶することすらある問題含みの研究領域であることを日々実感できることにある。もし仮にコミュニケーション技術開発をめざす電気通信科学における最適な理想状況がノイズの縮減にあるとすると、それとは逆に、社会や文化に埋め込まれた対人コミュニケーション研究の理想とは、コミュケーション不全状態の諸相とその存在論的意義を明確化することにあると考えられる。

…コミュニケーション不全状態

コミュニケーションの不全を有効活用する

これまでの私の主張をまとめてみよう。まず、大学という組織が、内部のみならず大学を取り囲む社会との関係においても、情報伝達や意識の共有化という点において良好にコミュニケートしていないという厳しい現状を、私たちは理解しなければならない。この難問が未解決なままなのは、私たちがコミュニケートする努力をしていないことに原因があるのではなく、良質なコミュニケーション手段を私たちが十全に活用してないことが原因だ。未知の良質なコミュニケーション手段を発見していないことが問題をさらに複雑にしている。また対人コミュニケーションにおいては、良好とは見なされていないコミュニケーションにも、それを精査し解明可能な豊かな問題として転換するために、大いに存在論的価値を認めなければならない課題も浮かび上がってきた。逆説的だが、コミュニケーションの不調や不在は、その有効な活用のための最大の試金石になる。

…良質なコミュニケーション手段

これらの提案は一見奇妙に思える。対人コミュニケーションの改善を目指そうとしたり、またその「秘伝」をさずけるマニュアル教育をおこなおうとしたりしている法人組織が、当座の解決策も満足に提示もせず、コミュニケーション不全の有用性を声高に主張しているからである。私たちの提案は無謀だろうか？　コミュニケーションデザイン・センターは、これらを含めたさまざまなアイディア、そして時には難問・奇問・珍問を

…コミュニケーション不全の有用性

大胆に提案する組織なのである。そのような提案はCSCDを経由することで、阪大内のいかなる関係者も発言可能になるのだ。くりかえしになるが、そのような大胆な視点の転換は、阪大の教職員が学内の共同利用施設であるこのCSCDと（研究と教育の）ジョイント・ベンチャーすることで、まさに容易に得られるのだ。

ジョイント・ベンチャー…

以上、私が申し上げたことは、現在の大阪大学にとって、誇大妄想の議論にしか過ぎないように見える。しかしながら、あらゆる実証科学に仮説検証の手続きが不可欠なように、仮説を生み出すためのクリエイティブな想像力の意義を否定することはできぬ。人類にとって大学が存在する意義は、人間存在の可能性を伸展させることにあると私は信じている。阪大にとってCSCDが存在する理由もまったく同じである。未だ実現されていないコミュニケーションデザインに関するさまざまな試みがCSCDだけの専売特許でなくなり、それぞれの部局が横断的にこれにむけた協力体制がとれるようになる近未来がやってくるであろう。そのような未来が到来しなければ大阪大学はこの世に存在する意味がない。

部局横断的協力体制…

大阪大学のすべての学生と教職員が、今よりももっと良い大学でありたいと意識する限り、この組織の存在意義は過去のものになっていない、ということだ。我々の組織はアクチュアルな現在ではあるが、CSCDが近未来において過去の時代遅れのものになる時、CSCDの精神と我々が提唱し続ける実践の様式は、大阪大学のすべての組織の細部に宿っているはずである。